広報 いわしや

2017.7

第1号

発行所：平成いわしや会

「広報 いわしや」創刊に当たって

“いわしや”の名称を会社名にしている事業者同士が連携を取り、“いわしや”の名称と伝統が途絶えることが無い様に企業間で親睦と情報交換と事業継承を目的に、平成 9 年 2 月 15 日に発足した平成いわしや会も各会員のご協力のもと、昨年で 20 周年を迎えることが出来ました。ここまで継続出来たのは“同志いわしや”には、同じ血液が流れているからだと深く感じました。

発足以来“いわしや”の歴史や医療機器変遷の探求、そして“いわしや”の語源を知るべく「いわしやの源ここにあり」のお墓を訪ねました。また、各地の“いわしや”の会社を訪問しては、その会社推薦の風光明媚な所や世界遺産となった観光地等を回り、会の目的の 1 つである各会員同士のより深い親睦を築いて参りました。

今後はこの会を継続していくと共に、各会員の毎年の活動や“いわしや”に纏わる情報等を“広報いわしや”という形で発行し、後世に繋いでゆき、医療業界に脈々と続く“いわしや 390 年の歴史”を更に継続させ、伝えて行こうと思っています。

この創刊に当たり、“平成いわしや会”最高顧問松本氏の絶大なるご後援によりスタートすることを、御礼を込めましてご報告させていただきます。

（平成いわしや会 会長　西方　晃）

「平成いわしや会」の存在意義

― 何でも「AI」の時代だからこそ ―

人の「心」の繋がり

昨今の世相は「AI（Artificial Intelligence＝人工知能）とかIoT（Internet of Things＝モノのインターネット。ウェアラブル医療機器等もその 1 つ）を言わずして、人に非ず」といった感もあります。しかし、AI が囲碁や将棋の名人に勝ったからとメディアがはやし立てたからといって、それらを趣味とする人々がそれらを止めるとは思えません。やはり「人と人との繋がり」の上に立つ勝負に真の面白味はあるでしょう。ましてや人間の心身を相手とする「ヘルスケア・ビジネス」にあっては、これから「ヒトと AI」のすみ分けが求められる時代でしょう。又、「グローバル化、イノベーション」と叫ばれる中、ますます厳しさを増すであろう本業界にあって「心の繋がり」を基軸とした異次元の「協業化」が進んでいけば、西方会長を中心とした「平成いわしや会」の存在意義は更に増していく事と思います。

明治 150 年

元号が続いていれば来年は「明治 150 年」の由。政府が何らかの記念イベントの一環として各業種毎の明治年間、或いは、それ以前からの創業企業を調べています。行政からの依頼により医療機器業界のそれも調べました。十指に余ります。まさに「継続は力なり」。

「風」を生かす

1 年余の時間をかけて製造・流通・使用者の各団体・有識者を巻き込んだオールジャパン体制の「医療製品識別（UDI）とトレーサビリティを推進する協議会」が組成され、来年中には何らかの結論が出るでしょう。又、7 月中には「単回使用（SUD）医療機器の再製造」に関する制度が公布されると思います。こうした新しい「風」をビジネスに生かすには、あらためて「バーコードや RFID」も勉強しましょう。

情報共有化

こうした各種情報の共有化には電子媒体のみならず、此の度の紙ベースによる広報活動の重要性も増すことと思います。

（平成いわしや会・最高顧問　松本　謙一）

平成いわしや会ウェブサイトのトップ画面

平成いわしや会のウェブサイト開設される。

2017年7月に平成いわしや会のウェブサイトが開設されます。会誌「広報いわしや」の発刊に合わせてのオープンで、平成いわしや会の活動報告、会員名簿をはじめとして、いわしやの起源や由来、現代にまで続く店・会社を紹介します。

「いわしや」という屋号のついた看板は、東京でも本郷界隈にしか残っておらず、その数もわずかです。時折、新聞雑誌などにおいて「いわしやって何？」というタイトルで紹介されることがありますが、その屋号の由来も伝統もこのままでは風化してしまう懸念がありました。最も残念に思ったのは、「いわしや」についてきちんと説明されたホームページがないことでしょう。これでは「いわしや」という屋号に興味を持った人たちに正確な情報を伝えることができません。「いわしや」の公式ホームページ開設の必要性が出てきました。

掲載されている内容は平成いわしや会発足15周年記念誌「源流から未来へ」がベースになっています。ホームページには昭和30年頃の本郷界隈の地図が掲載されており、当時の医科器械店がどの辺りに存在していたのか分かるようになっています。町名も春木町、金助町、湯島新花町、湯島切通坂町といった昔の名称で記されています。地図を見てみると当時、本郷界隈だけでも「いわしや」という屋号を使っている会社が9件ほどありました。

いわしやという名称は医療機器の歴史の中では特別な意味合いを持っています。私たちはこうした歴史を伝えていかなければなりません。

平成いわしや会 20周年記念式典を振り返って

昨年7月、平成いわしや会20周年記念式典総会が行われました。20周年という大きな節目となった今回の記念式典は、日本橋にあるロイヤルパークホテルにおいて多数の来賓の方々を招いて開催されました。有意義だったこの記念の式典を振り返りたいと思います。

午後1時に日本橋浜町のサクラファインテックジャパンの会議室において総会が行われ、終了後、同社の病理標本作製ラボ「さくらぼ」を見学。次にバスで移動し、サクラ精機の感染制御プレゼンテーションルーム「サクラとぴあ」を見学しました。サクラグループのまったく性格の異なる研修施設を見ることができたのは大きな収穫でした。

午後4時30分に水天宮のロイヤルパークホテルに到着。ホテル内のクラウンA室において20周年記念式典が開催されました。来賓代表として永島医科器械様、五十嵐医科工業様よりご挨拶があり、記念写真撮影後、懇親会が行われました。アトラクション、懇親会と続き、最後に平成いわしや会メンバー一人ひとりから今後の抱負を発表していただきました。これからまた新たな気持ちで会を継続するという思いを確認し、閉会となりました。

サクラファインテックジャパンの「さくらぼ」

サクラ精機の「サクラとぴあ」

ロイヤルパークホテルにおいて20周年記念式典を開催

転換期を乗り切る中越の雄

いわしや
株式会社悠久堂医科器械店

代表取締役　加瀬慎一氏

創業者、加瀬茂八氏は大正11年（1922年）、東京・日暮里に生まれた。太平洋戦争に徴兵され、衛生兵として従軍。復員後、衛生兵としての知識と経験を生かせる仕事として医療機器を志す。本郷の春木町にあった医療機器卸売業の「壷井臨牀工業」に入社し、医療機器調達について経験を積んだ。

昭和24年（1949年）、長男の慎一氏（現社長）が生まれる。

昭和30年代初め、茂八氏は壷井を退職し、一家（茂八の母、妻、長女、長男）で新潟県長岡市に引っ越す。壷井勤務中、調達の仕事で全国を飛び回っていた茂八氏は密かに独立を考えていた。その最有力候補として長岡を選んだという。

悠久堂医科器械店の創設

長岡ではまず地元の医療機器卸売業の「中越医療器」に入社し、壷井で培った調達の技術を発揮。同時に独立のための準備を始めた。満を持して独立し、市内新町に「いわしや悠久堂器械店」を設立したのは昭和32年（1957年）7月1日のこと。事務所は自宅だった。当時小学校低学年だった慎一氏は、「急に家の中が品物でいっぱいになったのを記憶している」と語る。

当時の医療界は病院や診療所が次々と開業し、これに伴い医療機器の需要も急速に高まった。長岡もその例に漏れず、仕入れた商品の置き場所を広げるため市内西神田に移転した。

小学生時代から慎一氏は働き手であった。毎晩のように茂八氏と一緒に長岡駅で東京から来る列車を待つ。当時列車は「東京急便」という荷物輸送の役目を担っていて、荷物を満載してやってきた。茂八氏と慎一氏は東京から来た医療機器を受け取り、駅地下にある古物商の倉庫に運び込む。一時的に預かってもらう話がついていた。

慎一氏が中学生になるとこれに月1回の東京行きが加わった。金曜夜、軽自動車の運転席に茂八氏、助手席に慎一氏が座って長岡を出る。土曜日の早朝、東京・本郷に到着し、すぐに医療機器メーカーを回って商品をできるだけ多く仕入れる。時には車の屋根まで商品でいっぱいだったと慎一氏。「楽しみは仕事のあとに後楽園で野球を観ることだった」。野球観戦が終わったらすぐ車に飛び乗って帰路につく。「学校には家の仕事の手伝いと言っておおっぴらに休んだ」とそんな時代でもあった。

昭和42年（1967年）、市内長町に倉庫を設置、45年（1970年）には倉庫に事務所を併設した。

上京して修行、長岡での活動

慎一氏は昭和43年（1968年）、高校卒業と同時に上京。本郷で理化学機器を取り扱っていた萱垣製作所に入社した。ところが2年後の45年、茂八氏が脳卒中で倒れ、慎一氏は休職して長岡へ戻る。茂八氏も体調が安定したことから一度仕事に復帰するが、半年後萱垣を辞めて家業に専念することになった。

安定したとはいえ脳卒中の後遺症がある茂八氏は営業全般を息子に任せ、経理などを担当することにした。慎一氏は茂八氏の主な取引先である開業医を引き継いだのに加えて、萱垣製作所で培った病院の検査室を新規に開拓すべく、長岡市内の総合病院に営業をかけ顧客化に成功した。さらに営業エリアを新潟県全域に広げたのもこの頃だ。

昭和47年（1972年）7月、悠久堂器械店を有限会社に法人化して「いわしや 有限会社 悠久堂医科器械店」と社名変更した。資本金は120万円。茂八氏が代表取締役社長、慎一氏は専務取締役になった。

会社は順調に成長し、昭和52年（1977年）には資本金を600万円に増資。翌53年（1978年）には株式会社となった。60年（1985年）には茂八氏が会長、妻マサ子氏が社長に就任した。

医療機器の電子化が進み、転換期を迎える

昭和60年代に入ると検査機器の電子化が急激に進み、大手医療機器メーカーが中心となったことから、医療機器ならびに病理検査機器に舵を切った。この方向転換が奏功しさらに業績がアップし、平成2年（1990年）には資本金を1000万円に増資し、7年（1995年）には市内七日町に事務所と倉庫を移転した。茂八氏は5年（1993年）に会長を退いた。

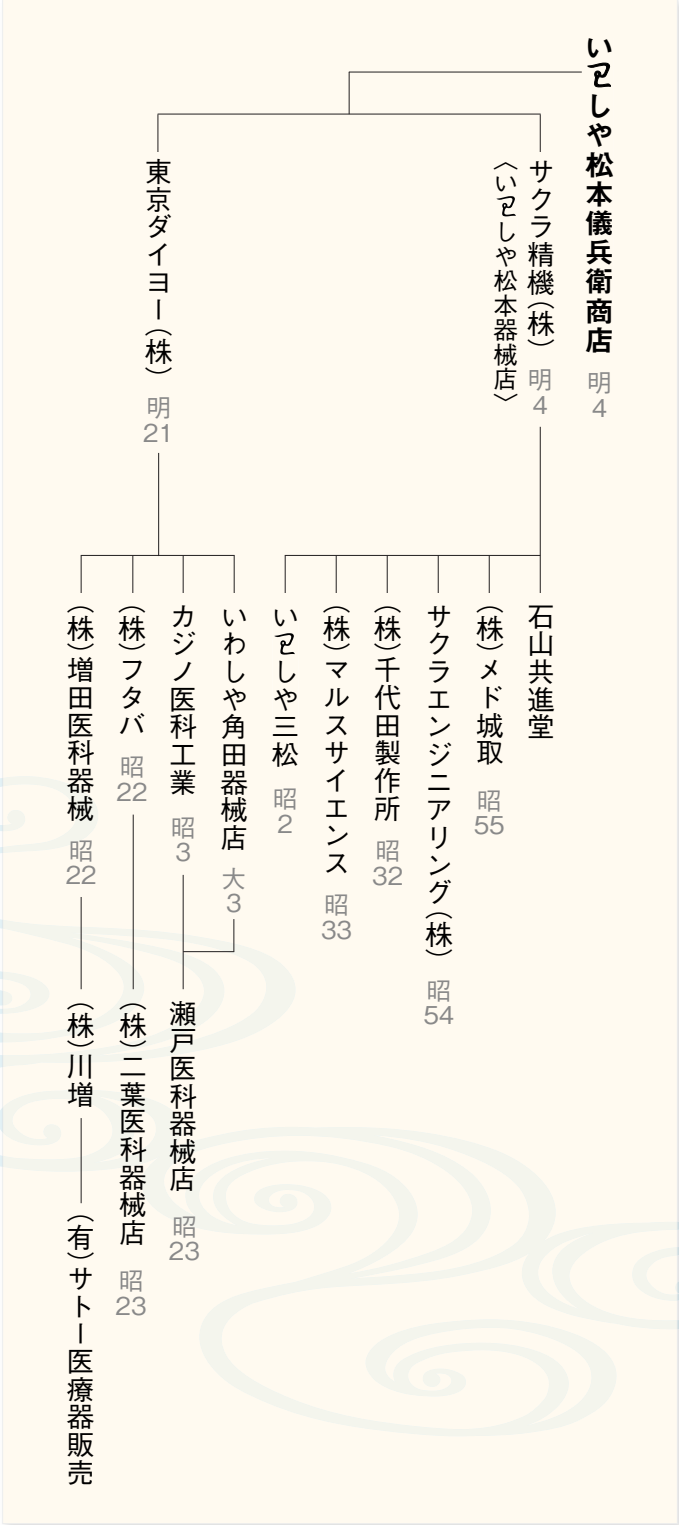
この頃から、長岡技術科学大学や長岡工業高等専門学校などを取引先として理化学の実験機器も取り扱いを始めた。これが東京理科大学など他の技術科学系大学へと顧客層を広げるきっかけとなった。

平成10年（1998年）新潟市中央区に新潟営業所を開設。翌11年（1999年）にはマサ子氏が会長、慎一氏が社長に就任した。12年（2000年）介護保険事業者を取得、15年（2003年）資本金を1500万円に増資、17年（2005年）高度管理医療機器販売業を取得、同年に資本金を2000万円に増資、と平成10年代は企業としての体制が目まぐるしく変わった年代だった。それは会社がさらに拡大を遂げ続けている証でもあった。

平成22年（2010年）新潟営業所を現在の中央区湖南に移転。現在の所長は慎一氏の子息で専務取締役の宗一郎氏である。茂八氏から数えて3代目となるが、「若い社員とともに顧客ニーズに的確に対応できるよう、常にブラッシュアップしてほしい」と慎一氏はエールを送る。

本社社屋

いゐしやの系譜 その一



「いゐしや」のルーツは、今から遡ること三七〇年以上前の江戸・寛永（一六二四～四四年）のころの「薬種店（ヤクシュダナ）が「いゐしや」の起源とされている。この歴史のある「いゐしや」の言われについては、諸説がある。

薬種問屋の傍ら医科器械類を扱っていた店が、医科器械を専門とするようになり、その後、いゐしやで修行した人が次々と〝いゐしや〟を名乗るようになり増えていった。「いゐしや」の系統には、「松本姓系」と「岩本姓系」がある。現在、松本姓系としてはサクラグローバルホールディングを始めとして、東京ダイヨー器械店、カジノ医科工業など、岩本姓系としては伊藤超短波を始めとして、瑞穂医科工業、永島医科器械など、いゐしやの歴史と伝統を継承している。両系統とも業祖は和泉国堺（大阪府堺市）で網元をしており、同時に薬種店を営んでいた。薬種店がどうして「いわし（鰯）」の名を屋号としていたかの理由については、正確に伝承されていない。（平成いわしや会一五周年誌より）

広報 いゐしや
発行所：平成いわしや会
編集発行：東京都文京区本郷 2-40-7 YG ビル 7F　株式会社デュナミス